対処的レモネード

普遍物人

蝉が忙しなく必死に叫ぶ様子を聞きながら男は道を急ぐ。昨日、現在交際中の彼女に呼び出され、この暑い中、集合場所に指定されたカフェに足を運んでいるところだ。

集合時刻は十一時半。現在の時刻は十二時半だった。昨日、深夜のゲームで夢中になってしまったせいで寝るのが遅くなり、結局起きたのは十時。自分の身だしなみを整えるのに一時間程度かかる男はその時点で遅刻確定だった。

カフェに入り、男は自分の彼女の名前を店員に伝えると、店員はある席の方をチラリと見つめた。男はその視線の先を追う。彼女の姿を捉えると、男は店員を一瞥するでもなく、店内に入っていった。

「やっほ。久しぶり」

男は彼女の目の前の席に座る。彼女はスマホから目線を外し、男にふわりと笑いかけた。

「暑かったでしょ？」

彼女は少し外の方を見て笑った。先ほどの店員が男の分の水とおしぼりを持ってきた。店員が会釈するのに対し、彼女が小さく会釈する。男は満足げに冷たいおしぼりを取り出して、顔面の汗を大胆に拭った。

「すごく、ね」

男は店員から出された水を一気に飲み干し、コトリとテーブルの上に置く。まだ溶け切っていない氷がバランスを崩し、からりと小さな音を立てた。

「もう太陽もここまで出しゃばんなよ」

男はおしぼりを放りだし、ため息を吐きながら、背もたれに堂々と背中を預ける。

「太陽のせいにするの？」

彼女はクスクスと笑いながら男に問いかける。

「だって、太陽がずっと空にいるから、そういう話になるんだろ」

男は冗談交じりに答えた。実際、男は何回太陽に向かって恨み言を呟いたか覚えていない。彼女は事前に頼んでいたであろうアイスコーヒーを一口啜った後、中の氷をストロー

でかき混ぜながら答えた。

「だったらもっと早く言うべきだったね」

男はギョッとして彼女を見つめた。彼女はさらに氷をかきまぜる。

「知っている？　夏至の日は6月21日。そこからタイムラグがあって、今の気温になっているんだよ」

男は冷房が効きすぎているのかと思った。冷えた汗で男は身震いする。アイスコーヒーから目が離せなかった。

「もし、太陽に対して、個人的な要件があるなら、その前に伝えるべきだったんだよ」

男は彼女の顔をチラリと見つめる。にこやかに笑っている彼女がどこか不気味に思えて、慌ててアイスコーヒーの方に目を向けた。

「何もかも遅いって？」

男は震える声でそう答えた。

「そういうこと」

彼女はもう一度コーヒーを啜る。コーヒーの中の氷は幾分か小さくなっており、量も、あと一口か二口といったところだった。

「な、なに空想の話を真に受けちゃっているんだよ」

男は慌てて彼女の目を見て笑って見せる。男はもう何も残っていないグラスを持ち、氷が少し溶けたその残りを少しだけ啜った。

「ちょっとした言葉遊びでしょ。そっちこそ、何真に受けちゃっているの？」

彼女はその表情を崩さない。

「……気持ちわる」

男は表情を曇らせ不機嫌そうに答えた。

「そう、言っていればいいんじゃない？」

男は彼女の反応がいつもと違うことに慌てる。彼女はこういう時、大抵悲しそうな顔で謝って来たはずである。男は今日ここに呼び出された理由を考え始めた。店内は軽快なボサノヴァの音楽が流れている。そこに微かな蝉の声が混じっているように感じる。しばら

くの沈黙の後、男は話を切り出した。

「……俺」

途端に彼女はそれを遮るように千円札を机に置いた。

「今まで楽しかった。ありがとう」

女は清々しい表情で男に小さく手を振る。男はその手を取ろうと体を乗り出したが、それ以上体は動かなかった。女それを見る間もなく店員に一言断ってその場を後にする。店員がこちらを怪訝そうに見つめている。男はそれに耐えられず、呼び出しベルを叩くように押した。

店員が来る間に男は慌ててメニュー表を捲る。目についた、適当なドリンクを男は店員に頼んだ。

「レモネードを、一つ」

それは、この暑い夏にはピッタリのドリンクだった。